

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

活字が立って、見えたことがある。灰色のステイールの机の上のことである。机の上にはあまり物が置かれてなくて、まわりを見回しても、ほとんど物らしい物がなかった。せいぜい花瓶代りのぶど

う酒の瓶と、朝飲んだコーヒーがまだ少し残っているカップ。透明な茶色の耐熱ガラスでできているこれは、時によってはスूपにも日本茶にも、インスタントみそ汁を飲むのにも使用されるものだ。フランスの大学の女子寮で暮していたときのこと、考えてみれば、あのときほど私の周辺に物という付属品の少ないことはなかった。人間という付属品はなおのこと、である。

私はブルーストを読んでいた。広い机の上のプレイヤド版には理想的に光が当たっていたから、たっぷりすぎる睡眠のあとのこの時間、決して眼が疲れているはずはない。

その白い頁の中で、アルファベットがによき、によきと立った。立って、くねくねと身をよじらせ、踊った。

その頃の私は、実に透明な心持ちでブルーストを読んでいた。この得体の知れない大作家を研究するという名目でそこにいるのであったから、ブルーストを読むというのは何よりも先に私がすべき

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

ことであつたには違ひないのだが、そんな気負ひは私の中にはなく、言ってみれば他にすることがないというふうには、プルーストを讀んでいた。余談ながら、あれはそんなふうには、果てしもなく悠長な暇つぶし、といった讀み方をするのが一番ふさわしいのではないかと思う。

もつとも、プルーストばかりを讀んでいたわけではない。他のものも讀んだ。『感情教育』をはじめて讀み始めた（しかし間もなく放り出した）のもあの頃だし、今では表題も忘れてしまった大衆小説とか、セヴィニエ夫人の、おそらくは受験参考書か自習用教材と思われる解説付きの入門書なども、（本の構成に興味を覚えて）買って讀んだりしてみた。

といつて、本ばかり讀んでいたわけではない。もともと刻苦勉強するという性ではないから、何が何でも机にかじりついていようという気などは毛頭ないのだが、何しろ他にすることがないのである。一番良くやったことは、ベッドにごろんと横になっていること、だ

ったかもしれない。フランスの地方都市のそのまた街はずれ、晴れ渡った初冬の日など空気はひんと澄み切つて、ほとんど稀薄といった感じでさえあつたが、稀薄だったのは空気ばかりではない、むしろ私の生活、私の生命だった。

ベッドに仰向けになつてみると、時間が勝手に流れていく。その流れ方は早いこともあれば遅いこともあつてまちまちだが、それが何もしないでぼうつとしているこちらの精神に由るなどは、どうも考えられなかつた。何も考えないでいることもあれば、一生懸命何かを考えていることもあるのだが、考えたからといつて、時が早く過ぎるわけではなく、たいしたことを考えていたのではなく眠つていたのでもないのに、気がつくといつに夕闇が漂つていたりするのである。

そこで、他にすることがないから、また机に向かう。我ながら奇妙なのは、こんなときでも本を讀むときは机に向かうことだ。もの

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

がブルーストだからということではまったくない。週刊誌でも、たいていは体を起こして正面を向いて読む。書見台があればなお良い。ない時は手近な本を二、三冊重ねて台にする。これが私にとっては最も楽な読み方である。例外は大きな辞書を読むときで、このときは腹這いになる。もちろん、空間的条件がこれを可能にするならば、であるが。

読みさしの文章が、また流れ始める。ブルーストの文章は一見どうでもよいようなことが書いてあるが、それをどうでもよいような気持で読んでみると奇妙に波長が合ってきて、その波に揺られて気がずーんと深くなったり、色合いを増したりする。

そんなときだった。活字が立って、踊るような気がしたのである。いま考えてみれば、姿勢を正して紙面と正面から向き合っていたのが良かったのだ。そうでなかったら、活字が立ったのだから首のねじれを気にしているのだから、言葉が踊ったのか自分が寝返りを打ったのか、わからなかったに違いない。

それは『失われた時を求めて』第三巻の『ゲルマントの方』の一部で、正直に言うと、それ以前に読んだときには、この巻が最も退屈に思われたものだった。殊に、社交界での人物描写や会話は

やたらに冗長でメリハリが無く、この部分を読み通すことはひとつの山を越えるに等しかった。それでも何とか読み通したのは、二十歳の向上心と無為によるところが大きいと思うのだが、そんな馬鹿気た努力にもそれなりの理屈のつけようはあるもので、次々と巻を重ねて最終の第七巻を大感激で読み終えた私は、この作品の主人公が真の天職を発見するに到る以前の不毛な道程である社交界描写を自分自身の不毛な読書になぞらえて、無意味に冗長であったというのもそれなりに理由のないことでもなかったのだ、とまことに愚かしい納得をしたものだった。

そんな部分をまたも開いて見ようという気になったのは、かつての不本意な読み方への反省によるものだったかもしれない。がまた

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

同時に、こんな時、こんな場所でなくては、プルーストの本文などとうてい腰を据えて読んではいられないだろうという思いもあった。読み返してみたら、やはりあまり面白いとは思われなかった。しかし今度は前のようにひたすら先を急ぐというわけではなく、心が奇妙に空白になっているせいもあって、冗長は冗長なりにそれに調子を合わせるゆとりがある。中に出てくる食べ物や道具も、こちらへ来て実際に見知ったものも多くなって、まったく些末なことがらにもそれなりの現実感が感じられる。それに人々の話し振るも、そうだ、フランス人はこういうものの言い方をするなあ、眼の玉をむいたりして、きつとここでは思い入れたつぷりに胸をそらせたに違いない、うん、わかるわかる。そんなことを考えていたら、次第次第に引き込まれていって、我が「研究テーマ」であるところのプルーストという大小説家のことはきっておいて、いま眼の前でやたらに喋っているこの人物の言葉つきや、その言い草の馬鹿ばかしき、それに文章には表われてこないけれどもきつとそうであるに違いない

表情の歪みなどが眼に浮かぶような気がして、わくわくしてきたのだった。そしてその女性の身振りに合わせて私もついついニタツと横眼を遣ったりなどしたら、何と！活字がくねくねと身をよじらせたのだった。

それはたとえばこんな部分だ。場所はヴィルパリジ侯爵夫人のサロン。女主人が、このところしきりと訪ねてきて今日やつと通してもらえたルグランダンという男のことで「カンブルメール夫人という妹がいるらしいけれど、でもそんな名前聞いたって、あなたにも私にもピンと来ないけれどねえ」と耳打ちしたのに対して、姪のゲルマント公爵夫人が答える科白である。何がどうくねくねしたのか、僅かなりとも掴みとるべく、とりえあえず次のような日本語に直してみる。

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

「あらやだ、私、よく知っていますわよ」

とゲルマント夫人は手を口にあてて叫んだ。

「いえね、知っているっていうわけじゃないの、でもバザンが、どこだったかでその人のご主人て人に会ってね、どういうつもりか、そのおデブさんが私に会いに来るようになって言ったらしいの。その人が来たときだったら、まあちよつと言いやがなかったわよ。ロンドンへ行ったらって言うの。それで、大英博物館にある絵を、みいんな数え上げるんですもの。今だって、こうしてあなたのところを失礼しますでしよ、そうしたら私、あの化け物のうちへ名刺を置きに行くんだけど、それだって、あなた、なまやさしいことじゃないの。だって、今にも死にそうだとか言って、いつだってうちにいるでしよ。それで夕方七時だろぅが朝の九時だろぅがお構いなしに苺のタルトなんぞ食べさせようとするんですもの。そうよ、決まってるわよ、化け物ですわよ」

ゲルマント夫人は伯母のもの問いたげな眼に向かって言った、

「なにしろ考えられないような人なのよ。もの書き、なんて言うんですもの。ま、ともかくそういつたことをね」

「もの書きって何のことなの？」

ヴィルパリジ夫人は姪にたずねた。

「知りやしませんわよ」

ゲルマント夫人は腹を立てたようなふりをして叫んだ、

「知りたくもないわ。そんなフランス語、話しませんもの、わたくし」

訪問を受けて会ってあげるだけで相手にとっては大変な名誉と格付けになるとこのゲルマント夫人が、なんであるブルジョワ風情とつき合わなければならぬの、と癪しやくでならないけれども、そ

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

れも夫公爵の頼みとあれば無下に退けるわけにもいかず、というのも内実はまったく冷え切っていないながら外見だけは新婚のように甘く振舞う夫婦生活で、これまた人前では才気あふれる妻をちやほやしなながら、時に虎のような眼で彼女を睨みすえる男の言うことだから、従わないのも恐ろしい。加えて相手の女は新興の芸術を愛好し、何にでも独自の意見を持っている新しいタイプの知的女性である。社交界きつてのセンスとエスプリの持ち主と評判の公爵夫人としては、夫の思惑など脇へ置いて、どうしても譲れぬところだ。しかもここはヴィルパリジ夫人のサロン。あれがあ有名なゲルマント夫人かと人々の好奇と讚美の視線の降り注ぐ中で、会話だけはぜひとも優雅に気のきいたものではなくてはならない。内心にせめぎ合うさまざまな思いが彼女の声にいかん張りを与えたか、想像に難くないのである。ちなみに、カンブルメール夫人とはシャルル・スワンの愛人でもあった人で、スワンが遂にオデットとの恋愛の不首尾を観念することになるサンリトゥベルト夫人の夜会で、細身の姿態をひる

がえして壇上に駆け上った新婚の彼女を記憶にとどめている読者にとつては、ここでの描写はまた別の意味で感慨深いものがある。

が、私がハツと胸を衝かれるように感じたというその感じは、そうした状況の読みが一段と深まったということではなく、文章の端々に読み取れる心の動きなどということでもなかった。そういうことなら、原文に触れる以前にすでに翻訳を読むだけで充分に理解できたはずである。

そうではなくて、私は文章そのものに感電したのだった。説明的な文章は説明なりに、人物の科白は科白なりに、それを織り成している言葉の生命力とでもいうべきものに、たぶんその時はじめて気がついたのではないか。それ以前にもおぼろ気ながら察してはいた、フランス語による「文学」を、私は生まれてはじめて体験したのではなかったか、と思うのである。

とはいえ日本語になってしまえば、もはやミもフタもない、これ

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

はつまるところ日本語で、少々ぎくしゃくしているが、しかし日本語以外の何物でもない。私を感じた、あるいは感じたように思ったあの言い難い気迫とは、たとえば雷光とその絵のように似て非なるものである。それにこういった訳業なら、すでにして見事な名訳が存在するのだから、今更その真似を試してみたところでどうなるというものでもない。

それにしても「翻訳不可能の文学」などと我ながらあきれられるほどの大仰なことを言い出したものだ。それにまた先に書き抜いた部分にしても、私は何もこれこそが「文学」、これがブルーストの「真髓」などと思っているわけでもない。ただちよつと面白ければ、それだけのこと。こんなものならブルーストの中にふんだんにある。ブルーストでなくても、そこらじゅうにありそうだ。

たしかに、私が考えていたのはそんな深刻なことではない。そうではなくて、本当はもっと他愛のないこと、単純なことなのである。ただし、その単純なことを説明するのが、なかなか難しい。

それはたとえばこういうことである。日本でフランス語を読んでいた頃、私は *Oh! là là* という感動詞に何度も出会っていた。しかしフランスに行つてその言葉が実際に発音されるのを耳にした時、私は本当にびっくりした。その経験がいつ、どこで、どのような状況下においてだったかは覚えていないのが不思議なほど（たぶんあまりによく耳にするせいもあって）、その驚きだけは今もって実に鮮明である。

何に驚いたかと言えば、まずはそのリズムである。それはモース信号流に言えば「ツー・ト・ツー」とでも表現し得るリズムを持っていた。日本での私はと言えば、これが一つのまとまりを持った語群であることを知るのにも一つの段階を越えなければならなかったはずだが、その後でも、活字の配列だけを眺めて判断する限り、これが実際にはどう発音されるのか想像することは難しかった。私は頭の中でこの言葉を一本調子に「オー・ラー・ラー」、もしくは

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

尻下がりに「オ・ラ・ラ」と構成してみて、それで事足れりとしていた。

いや事足れりとしたわけではない。よく突き詰めれば、どこまで変だな、フランス人というのはいぶん間の抜けた感動詞を使うものだ、もっとも映画などで見るところではかなりオーバーなゼスチュアをするから、感動詞もそれに見合って長ったらしいのかもしれない、といった程度のことでは考えたであろうけれども、それをそんなにも深く考えずにやり過ぎしたのは、要するに、その頃の私にとっては、どことなく釈然としないというのが何もこの言葉だけに限ったことではなくて、一事が万事、つまりは前の単語も後の字句も、しっくりわかるものなどひとつもないといった方が早いぐらいのものだったからである。

そういうわけで、例の公爵夫人の科白にしても、初めて辞書と首っ引きで苦勞しながら、まるで暗号を解読するように読んだときには、

「何と！ 私は彼女を完璧に知っている。あるいはむしろ、私は彼

女を知らない。しかし、神のみぞ知る場所でその夫に出会ったところのバザンが……」

といった具合に理解していたに違いないが、しかしそれでも私自身は読み解いたことに大いに満足していたことだけは、はっきりと言っておかなくてはならない。

ところが、フランスでは *Oh! là là* は *Oh! là là* であった。もはやモールス信号でも音符でも表現し切れない、本物の *Oh! là là* というのもこの言葉には、独特のリズムのみならず独特の高低アクセント、独特の息づかいが伴っていて、これを表現するには音声スペクトル分析などという最新技術を駆使して、素人が見たのでは何のことやらチンプンカンプンのグラフにでも頼るか、さもなければ、諦めて単に *Oh! là là* と書くしか方法がないからである。

しかもこうした変貌が、この感動詞ひとつではなくすべての言語

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

に起こったのだった。活字の字づらを見ている限りでは、言葉は実に整然と、ほとんど同じ間隔で並んでいるけれども、実際にはそのように、立派に訓練された軍隊のように存在しているのではないということ、私は痛いほど感じた。Oh! là làのように、単語と単語の間の時間的間隔はまことに個性的にまちまちで、時によって前の単語が後の単語に寄りかかっていたり、蹴とばしていたりする。どの単語も決して直立不動で前を向いているわけではないのだということが、私は生まれて初めて、つくづくとわかったのであった。そのとき、アルファベットが立ったのである。

しかし、考えてみればそれはきわめて当り前のことで、そんなことを知るためにわざわざフランスへ行ったなんて実に愚かしいことだと思われても仕方がない。それに、そういうことはフランス語に限らず日本語でも十分に言えることではないか、と。

確かにその通りである。だがその当り前のことをそうと知るために、私にはフランス語という外国語を手繰る必要があったのだ。外国語という使い慣れない道具だからこそ、それを使いこなす訓練の

過程で、その道具の機能や性格を改めて高速度カメラで撮影したようにゆっくりと確認することができたのだろう。

話をプルーストに戻せば、私はこんなふうにしてようやく、その小説的な面白さにおいて僅かながら深みを加えた読み方ができたように感じたし、プルーストだけではない他のフランス語の小説文章も、なぜそれが小説として書かれたかがわかるような気がし始めたのであった。

それでは何が深みを増し、何がわかるようになったのかと聞かれれば、それを説明するのは私にとって容易なことではない。というのも、書かれてあったことは前々からそう書かれてあったので、意味そのものには何の変化も生じたわけではないからである。強いて言うならば「オー・ラー・ラー」が *Oh! là là* になったというようにことで、そのために言葉と、言葉が掻き立てるもののが、輝きを増

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

した、魅力的になった、いっそう心に響くものとなった、のである。しかしそれは、という冷笑を含んだ声で、私の耳には聴こえてくる。それは語学力の問題ではありませんか。それもかなり程度の低い語学力です。つまり、あなたはもともフランス語の学力がなかったのが、やっとうどにか少し読めるようになったという、ただそれだけのことなのです。

まことにもっておっしゃる通り、である。私の語学力の低さというのは、冷静かつ客観的に考えてみるまでもなくひどいもので、一旦その点に思いを至すとすると、もはや一言もなく落込んでしまふ他はない。いっそ聞き直つて言つてしまえば、生まれて初めてフランス人におそろおそろ「ボンジュール」と言つてみたら、何と「ボンジュール」と返事がかえつてきて、うわあ、フランス語が通じた、意思が通じた、人間同志のコミュニケーションが可能になった、と小踊りして喜ぶ初学者の感動と大差はない。

それは確かにその通りなのだけれども、しかし百パーセントが百パーセントそれだけというわけでもないのではないか、そんな思い

が私の心のどこかにある。つまり、活字が立って踊つたように見えたあの感動には、語学力とはまた別の要因があったのではないかという気がして、もしそれがそうだとすると、その要因とは一体何なのか、という疑問が消えないのである。

こんなことを言うのも、活字が立った経験とほぼ時を同じくして、私はもうひとつ、実に奇妙な経験をしたからである。

やはり晴れ渡つたある日の午前中、私は寮のキッチンでちよつとした水仕事をしていた。そこへ日本人のTさんが飛び込んで来て、挨拶もせずに、いきなり、

「大変だ！ 日本は大変なことになりましたよ！」と叫んだのである。

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

Tさんとは、いずれ十指に満たないディジョン在住の日本人の中で、二人だけがほぼ同じ条件の留学生だという関係で、何かにつけて情報を交換したり行動を共にする機会があった。とはいえ広いキャンパスの反対側にある男子寮に住む彼が、この時刻、前触れもなしにここまで来るのは普通ではない。そのただならぬ表情を見て、反射的に私は最悪の事態を覚悟した。その私に、Tさんは三島由起夫の自衛隊乱入と割腹事件を教えてくれたのであった。

途端に私の心は複雑骨折を起こした。

いつだったか、安部公房が誰かとの対談で語っているのを読んだのだが、複雑骨折というのは、物体が骨に与える衝撃そのものの性質や強さによって起こるのではないのだそう。そうではなくて、これから何分の一秒、あるいは何十分の一秒後に自分の肉体が受けるであろう衝撃について、脳が正確に判断することができず、神経系統に発する命令に一瞬迷いが生じたとき、その迷いと乱れが原因となってまったく内部的に起こるのが複雑骨折だ、というのである。もしそうだとすれば、あのとときの私の気持はまさしく複雑骨折だ

った。私は三島由起夫の割腹自殺がどれ程重大なものなのか判断することができず、しかも「大変だ！」と言われた時の緊張を解くこともできず、我れと我が心をいかに統御するかについて、まったく途方に暮れたのであった。そして、知らされた事柄よりはバラバラになった自分の気持の方により多く気を遣いつつ、事件のあらましを聞いたのだが、それはあらましと言うにはあまりに単純で、話しているTさんもじきに白けてしまった程だった。

聞きながら、私はとりとめもなくさまざまなことを考えた。何よりも割腹という事実の凄惨さと軍隊的なものへの嫌悪が胸に突き上げ、そこに三島由起夫の一部の作品への愛着が微妙に絡み合った。

その一方で、こんな事件をフランス人たちにどう釈明したらいいものだろうという思案に気が重くなる。ついこの間も、一緒に食事をしていた夫婦の、奥さんが「日本の方はとても感情や趣味が繊細

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

ね」と言うのに対して主人の方が、でもあの経済進出のやり方にはきわめて軍国的なものがある、Vous etes dursi (あなたがたは強面だ、とても訳したらいいのだろうか、あるいはしぶとい、とても…)と私に強い眼を向けたのが思い出される。そしてまたTさんの、日本に残して来た恋愛が渡仏後程をへずして不首尾に終わったことをきっかけに、気がかりな抑鬱から妙な国粹主義へと激しく揺れ動いた精神状態のことも、考えないわけにはいかなかった。

それから数日の間に、街の店頭には、日本と三島について特集を編んだ雑誌が何種類も並んだ。それをレジのところへ持って行ってお金を払う時の気持は忘れられない。日本人であることが、とても辛かった。Tさんの気持はそれと逆だったようだけれども。

それはともかくとして、その特集のひとつに『憂国』の抜粋を載せているものがあって、私は初めてこの小説を読んだのだった。

フランス語で読む日本の小説は、物の名前がフランス語になっていたりして奇妙だし、かといって日本語のままローマ字というのもギクシャクし、のみならずそれと判明するのにいっそう手間がかか

ったりしてかえってやっかいなくらいだが、仕方がない。

場面は主人公夫婦の自決である。背後に控えた細君が夫の切腹を見守っている。頬にはとどめようもなく涙が流れている…。そこで私の眼はハツと立ち止まった。「化粧が落ちるのが厭だと彼女は思う」と読めたからである。証拠となる原文が手元にならないのが残念だけれども、それは意味をとり違えることも不可能なほど、単語も構文も単純だったと記憶する。しかし私にはどうにも理解できなかった。重ねて言うが文法的に、あるいは語学的に理解できなかったのではない。字づらの意味に関しては、まったく問題はなかった。また、状況として理解できないというのでもなかった。たしかに涙は流れるだろう。それは白粉をも流し去るだろう。しかしこの期に及んでそんなことを気にするということが理解できない。今にも息絶えようとする夫の後姿を見守りつつ、悲しみの極みの涙を流しつつ、

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

その涙で化粧が落ちることを心配するとは、何と理不尽なことだろう。しかもすぐ後には自分も死のうとしていているというのに。いや、百歩譲ってそういうこともあるとしよう。最も悲劇的な瞬間にも、人はふっとひどく日常的なことに気持がとらわれたりするものだ。それは幾分、イヨネスコの的な、あるいは向田邦子的な感覚だと言えないこともないけれども、今のこの場合には通用しない。いつも身だしなみに気をつける若妻の、日頃の習い性となって死の直前にも化粧のことを気にかけることがあったとしても、そのように不条理なひずみを起こすのが人間精神の現実のありようであるにしても、そのことをここで持ち出しては、この小説の筋が歪む。美が損われる。言ってみれば私は、文学的にこの一句が理解できないのであった。

日本にいて、日本語でこれを読んでいる人にはわかって貰えないことかもしれない。けれども正直に言って、それがその時の私の考えたことであった。小首をかしげる思いで私は考えた、涙で流れ落ちるような厚化粧をしているのかなあ、この人は。

その不審な思いがどうにも整理し切れないでいるうちに、私はあることに思い当った。そうだ、これはきつと誤訳に違いない。「化粧が落ちるのも気にならなかった」とか何とかいうのを、慌ててこう訳してしまったのではあるまいか。そうでなくても、ちよつとしたニュアンスを掴みそこねて、結果的にこういうことになってしまったのに違いない。いったい原文はどういうことになっているのだろうか。そう思うと、好奇心に胸がうずくような気がした。

こんなふうに考えたというのも、それまでに何度か、ちよつどこれと逆のことを経験したことがあったからである。フランスの小説の翻訳を読んで、どこかおかしい、何だか妙だ、と思うことがあって、たまたま原文に当たってみて、ああそういうことか、と納得のいくことがある。こういう場合にももしろいのは、一旦原文に触れて、その後にもう一度訳文に戻ってみると、今度は原文と同じよ

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

うに読めてしまったり、そうでなくても、なるほどこういうことならこう訳す他ないだろうと認めざるをえないことが多い、ということだ。それもそのはず、こういう翻訳をしているのはたいていはフランス語、日本語ともに力量をうたわれたフランス文学の大家であって、その訳業に私などが文句や感想を言う僭越の方が恐ろしいくらいのものだが、ここは一介の翻訳小説読者として雲の上のことは目をつぶって物言う次第だ。

そんなわけで、あながち誤訳とは言えないけれども、しかし原文に立ち戻って後はじめに理解可能となるようなことが、翻訳にはまああるということを知っていたからこそ、私は、メーカーシップがはげるかはげないかに閲して、原文を見たいと思ったのである。

日本へ帰ったのはそれから一年半ほど後のことだった。ほとんど時をおかずして『憂国』の頁を開いたように覚えていたから、この一年半の間にも、この一点にまつわる私の好奇心はあまり衰えなかったと言えるだろう。何はさておき真先に問題の箇所だけを読んで、私は、あっ！と思った。正直、声を上げるほどの驚きだった。こ

う書いてあったのだ。

「じゃあ、行くぞ」

とついに中尉が言った。麗子は畳に深く身を伏せてお辞儀をした。どうしても顔が上げられない。涙で化粧を崩したくないと思っても、涙を禦めることができない。

私が驚いたのは、まず第一に、原文が仏訳の通りだということだった。至極当然であるはずのことにこんなにも驚いたということだ。仏訳に対する私の不可解の思いがいかにか深かったか、逆に思い知ったほどだったが、しかし本当の理由はそれではなかった。私が驚いたのは、その文章を一目見ただけで、自分がそれを完璧に理解でき

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

たことだったのである。私には分った。化粧を崩したくないのは死顔を美しいものにしたいたいということ。それは即ち死にざまを潔いものにしたいたいということで、それというのも、死にざまの一点にこそ生のすべての意義がかけられているからだ。その事情が、解釈も熟慮も必要とせず、ほとんど瞬間的にわかったのだ。そしてそれがわかると同時に、私はこのことをまったく感じ取ることのできなかったフランスでの自分を振り返って、第三の、実に何とも言いようのない驚きを味わったのである。

さて、それから改めてこの短篇を初めから読み直してみれば、この小説にはそのような容姿や身じまいに関しての美意識が満ちみちている、と言うか、それしかないと言った方が早い。くらのものなので、然るべき状況で落着いて読めば、問題の箇所の記事にたとえ少々の手ぬかりがあったにしても、意味を取り違えるおそれはなかったに違いないと思われた。だが、ここでは『憂国』という小説そのもののことをあれこれ言うつもりはない。私がこの小説について語っているのは、それと出会った状況がいささか特殊なものであ

たためで、問題なのはむしろその状況の方なのだということ、改めて言うまでもあるまい。

そうなのだ、状況が特殊だったのだ、と私はその後自分自身への弁解のようにして、未練がましく考え続けた。なにせあの時は心が複雑骨折を起こしてとりとめがなくなっていた。それに読んだのがほんの一部の抜粋にすぎないということもある。全体の流れの中で読めば気の迷いもなかったかもしれないものを。何と言ってもフランス語だというのがまずいのだ。マキヤージュ maquillage という言葉からついつい連想してしまうのは、アイシャドウにつけまつげといった「メーカーキャップ」で、白粉をはたき紅をさす、といった「薄化粧」からはほど遠い。そうでなくても、バス停の広告や雑誌の裏表紙などで、lait démaquillant (クレンジング乳液) という文字を見慣れている眼には、se démaquiller は「厚化粧が剥げる」という

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

感じで、「化粧が崩れる」風情には結びつかない。

要するに私は、エネルギーで自己主張が強く、それなりにチャーミングなフランスの女たちを間近に見て暮しているうちに、自分とフランス人との距離をひしひしと感じつつも、いつの間にか、夫に向かって深ぶかとお辞儀をし、化粧の崩れを気になげながら流れる涙をどうすることもできずにいる日本の女性像を、何とも奇異なものと思うようになっていたのである。それについては、もちろん、先あげたような理由もある。だがそのようないちいちの要因とは別に、もっと漠然とした、もっと根深くて得体のしれない要因もあったのではないだろうか。

それを、たとえば空気のようなものだ、と私は感じている。

フランスにいて、ごく稀れに日本酒を飲む機会に恵まれた。そんな時、私たちはひどくありがたがってこれを味わった。当時でもフランスで生活している日本人の境遇はさまざまだったから、日本酒など珍しくも何ともない人もいたであろうけれども、若くて貧しい私たち、少なくとも私には、ちよつと口には言い表せないような貴

重品だった。当然、ご馳走してくれる方も得意満面で、良く良く心して頂け、と口に出してまでは言わないだけという顔をしている。そんなお酒だから、飲んでまずいはずがなかった。まずいと思う心のゆとりなどないのである。飲む前から、心は感激にふるえている。ガブ飲みするなどめっそうもない。珍しいものだからと、日頃はお酒を口にしない人にまで勧めたりする。

しかし正直に言えば、私はそうして呑んだ日本の酒をおいしいと思ったことがなかった。前後の事情で、つまりあまりにありがたがって特別扱いして味わうために、結果として味も何も分らなくなってしまうというわけではない。本当においしいくないのである。どこかヌルツとして、甘ったるすぎて、味にメリハリが無くて、まったく魅力がない。その上、期待した程においしくないということ。何ともいえない索漠とした後味を残すのであった。

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

その理由を、私は色々と考えてみた。肴が合わないということもあるかもしれない。しかし肴などなくたって、最初一口飲むお酒は、おいしい時はこの上もなくおいしいものではないか。こちらの体質が少し変ってきているのかもしれない。連日のフランス風の食事のために、体の状態や要求するものが日本にいる時とは違って、それで好ましい反応を示さないということもありうる。周囲の道具立てが違う。顔ぶれが違う。話題が違う。

だがそれよりも一番問題なのは空気ではないか、と私は思った。温度や湿度や成分や、それと気がつかないほど微妙な匂いや刺激を含んでいる空気が、日本の酒とうまく共鳴しないのではないか。酒の魅力を引き立てることができないのではないか。そのために、酒はただ珍しいもの、貴重なものにすぎなくなってしまうと、本当の魅力を発揮することができなくなるのではないか。そんなふうに思ったものであった。

同じことが、小説についても言えるのではあるまいか。あたりじゆうに立ちこめているにもかかわらず、どうにも分析不可能な空気が、

のようなものがあって、それによって小説というものは本然を發揮したり、しななかったりすることがあるのではないだろうか。あの時プールの活字が立ったというのも、『憂国』が不可解だったというのも、つまりはそういうことだったのではないか、と思うのである。

ちなみにマルグリット・ユルスナールは『三島 あるいは《空》のヴィジョン』（ガリマール1981）の中で『憂国』についてかなりの頁を費している。三島由起夫という作家とその主要作品の解説、ないしは紹介であるこの著作で、『憂国』という小品が特に大きく扱われている理由は、ユルスナールが三島の自決をこそ彼の最大にして最高の作品と見ているからだ。『憂国』は、当然ながら、最良の手がかり、彼女の言い方によれば自決のアヴァンプレミエール（試

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

演会)と考えられるからであろう。

もっともユルスナールは『憂国』の原作(原語という意味ではなく、劇化や映画化の際の原作)を読んだのではなく、三島自身が能の様式を借りて演出し、かつ主役を演じた映画を見たのであるようだ。文字によるよりも映像による方がはるかに鮮烈で、そのためこの作品に関するペンに力がこもったということも考えられないではない。主人公の中尉が玄閑で長靴を脱ぎ、片足でよろけるということまで詳しく(「こうした場合によくあるように」という注釈までつけて)描写しているのだが、私はと言えば原作は知っていても映画の方を知らないのです、かえって興味深かったりした。

例の細君の化粧については、切腹の最中は「涙を抑えつつ」見守っているらしいが、その後、自らの自害に先立って化粧直しをするところでは「昔の日本女性がしていたように刷毛でぬり、粉をはたく(plâtre et poudre)化粧を直した」と書いている。ひよつとする映画では、この軍人の妻はまるで玄人女のように濃い水白粉でも使用しているのであるか。是非とも見て確かめたいところである。

そんなことはどうでもいいには違いないのだけれど、なにせ初めの躰つまきが躰つまきなので、妙な好奇心があとあとまで尾を引いて困ってしまう。

ついにながら、ユルスナールは『憂国』*Patriotisme* という題名についておもしろいことを言っている。すなわち、この題名よりは切腹の背景である掛軸の LOYALTE といい言葉の方がふさわしいのではないか。なぜならば、いわゆる愛国心は二人が簡単に天皇のために祈る時にしか登場しないのに反して、この青年が死ぬのは仲間に対する信義、妻が死ぬのも夫に対する信義に由るのだから、言うのである。どうも、その極度に様式化された映画では、この掛軸だけがほとんど唯一の装置となっているらしい。LOYALTE とは、原作から推し測るに「至誠」の二文字であろう。

ユルスナールが釈然としないのももっともだと私も思う。しかし

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

それならば LOYALTE が良いかと言えば、これまたどこかピントがずれる。patriotisme を「愛国心」と再度訳し直してみると、そのずれは一層ひどくなる。やはりこの作品の土台になっている精神構造や、それと不可分のきわめて漠然とした美意識を言うには「愛国の情」が一番適しいのかもしれないとは、ユルスナールの感想を待つまでもなく、この小説を読んだ直後に考えたことだった。

それよりも私になって仕方がないのは、日本語の「愛国」「至誠」が patriotisme、LOYALTE となるということだ。何も知らずにこれらのフランス語に出会ったとしたら、私は多分あまりためらわずに「愛国心」、「誠実」と訳してしまうに違いない。だが、そのような往き還りの間に、いかに多くのものが失われることだろう。そして、ちように加熱によって失われるある種のビタミンのように、失われたものの中に何かとても本質的なものがあるような気がしてならないのである。

文学というのは、小説であれ詩であれ、いずれ本の一冊、多くて

数冊で事足りるもので、これを味わうのに会場が要るわけでもなければ道具が要るわけでもない。何とも手軽なもののようにも思われるけれども、その中に含まれている意味やこめられた香り、味わいなどを質を損うことなく吸収しようとすれば、とても大きな場とか《空気》を選ぶものではないだろうか。

一旦そういうことを考えてしまうと、日本にいて、フランスでの生活経験も乏しく、フランス語も未熟なままにフランス文学について考えていることが、ひどく心もとなく思われてくる。そしてそのあげく、結局は日本に暮して日本語に馴染んでいるのだから日本の文学が一番なのだ、一見気がころの知れているように思われる小さな穴ぐらへ自分を閉じ込めてしまいたくもなる。そんな安直さは別としても、より深いもの、より純度の高いものを目指す限り、一種の純粹主義が頭をもたげるのは当然のこと、それにしては遠い

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

彼方の文学はおぼろにかすんで何とも頼りない。

だがまた文学とは、そのような得体の知れない未知のものへの癒しがたい思いをこそ基盤とするものではなかったろうか。とりわけ小説は、フランス語で *nouvelle* (新しいもの)、英語で *novel* (新奇なるもの)、という名称が示すように、本当のところ、珍しいもの、味わい方の分らぬもの、何だか理解できないもの、でなくてはその底力を発揮しないのかもしれないのだ。

そう思い返してみれば、フランスへ行って初めてフランスの小説が分ったと大騒ぎをする前に、その時までフランス文学をやって来た自分の気持の原動力の方が遙かに意味深いものだったとも言えるのである。現に読んでいる作品の歴史的・社会的背景はおるか、文意さえもどこか不明瞭なままに辿っていた小説的文章の、あの行間に輝いていた光はいったい何だったのかと、我がことながら今だに胸のときめく思いである。分らないこと、知らないことこそが最大のエネルギー源だった。

食べものにしても同じことで、おいしいもののかを「珍味」と

言う。珍しいものは本当は舌に馴染まぬもので、おいしいかまずいかの判断の基準さえ出来上がっていないのが本当であろうのに。その一方で、「おふくろの味」とも言う。これはまたあまりに慣れすぎたままって、口にするときにもおいしいかまずいかいちいち考えたりしないものことであろう。どちらについても言えることは、つまるところ、おいしいかまずいか分からないものだというのではないのか。

そういえば私自身も、フランスで呑んだ日本酒はまずかったなどと言っておきながら、学生時代にはとても口にするのできなかったブリというフランス産のチーズなんぞを百貨店で買ってきて、それと一緒に、昔は捨てるほどありふれたものだったという話なのに近年ばかりに珍重されるようになった数の子を並べ、他にひじきと揚げの煮物と湯どうふ、それに牛肉のタタキが少しあるのだけれど、

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

さってお酒は何にしたらいいかしら、やっぱりウイスキーあたりが無難だろうか、などと思案しているというのがこのところの生活である。

わが家の食卓のことを話しているのではない。小説についての、私の日常のありようを言っているのである。ではそんななかで、私が読む小説的フランス語の活字ははたして立っていると言えるだろうか。少くともうわべだけは、あれ以来またも年季を重ねたはずであるのだが。

と、これはもう、まことにくちおしいことながら、おおかたの時をぐうたらと寝ほうけているとしか言いようがない。一向に進歩しない語学力とは別に、職業的な慣れと年齢的無神経が加わって、事態はおそろしいものである。それ自体が魅惑の紗布でもあったところの不可解さに悩みながら、いつかはすべてが隅なく明かるむ日が来るに違いないと、将来に期待をかけていた日々の夢は実にはかなくて、もはやそろそろ肉体的な視力の方が気がかりになってきた。だが時として、それら寝飽きた活字どもがむっくりと上体を起こ

すような気のことがある。そんな時、私はあのフランスの空気がふっと鼻先をかすめて過ぎたり、背後に忍び寄りたりしているように感じるのだ。そしてそれが机の前であろうが教室の中であろうがお構いなく、やにわに、本当のフランス料理が食べたいなあ、などと思うのである。

思えばそんなふうに、いつも何事か本物というのを遙かに仰ぎ見て、それと自分との距離を測らざるを得ないのが、外国文学を志す者の宿命なのかもしれない。そういう悩みを知らずにいる人のことは、羨ましいとは思うけれども、しかしどこか信用できないような気もしないでないのは、もしかしてこれを、引かれ者の小唄、とも言うのであろうか。

そう言えば、『三島』の冒頭でユルスナールが書いていた。同時代の作家を判断するのは難しい、と言った後で、

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

……彼がわれわれとは別の文明に属している時には、これを判断することは尚一層難しい。その文明に対して、エキゾティズムの魅力、あるいはエキゾティズムに対する警戒心が加わるからである。三島の場合のように、彼自身の文化と、彼が貪欲に吸収した西欧の文化、つまりわれわれにとって平凡なものと、われわれにとって奇異なものが、それぞれの作品において異なる割合で混じり合い、さまざまな効果や生彩を放っている時には、こうした誤解の可能性はなお大きくなるのである。

然り、まさにそうした誤解の危険性とともに外国文学はあるのだが、しかしその誤解そのものが光源にならないでもないのである。そのせいかどうか、ユルスナールが三島を語る時も、日本人から見れば何ともありふれたこと、たとえば祭、たとえば懐紙を説明する

段になると、奇妙に文章に張りが出るようであったのは、そこで彼女が心の眼を大きく見開いているということではなかったろうか。

それともう一つ、ユルスナール言うところの「平凡なもの」と関わりがありそうで無いのが、外国文学につきまとうある感慨である。外国文学というのは何故か、深入りすればする程に、ある意味、平凡なものに近づいて行くような気がする。しかし、これは私ひとりの思い過ごしかもしれないし、それに私自身の知識はそう言える程深まったことがないので、本当のところはわからない。私はたぶん、他にさしたることもしないので、年齢を重ね、磨滅していく一方の自分の人生に対する思いと取り違えているのだろう。

ともあれ、いっかな見出し難い本物の、つかの間の輝きを探し求めるのは、すべての文学の基本的な性格に違いあるまい。とすれば、どこかまやかしの匂いのしないでもない外国文学も、本物との緊張

行間の光

— 日本の小説・フランスの小説 2 —

関係という点では、まさに文学の本然だとも言えるわけだ。その本然を、どこで、どのように打ち立てたら良いのか、本当の問題はそれなのであろうけれども。

(初出 一九八四年「ふらんす手帖」13号)